

緒 言

三浪明男

北海道大学大学院整形外科

変形性手関節症は手関節痛、運動制限、握力低下を来す代表的疾患です。Watson と Ballet (1984 年) は膨大な枚数の X 線写真を分析した結果、最も多くみられる変形性手関節症を SLAC (scapholunate advanced collapse) wrist と命名するとともに、1 つの重大な X 線学的特徴を指摘しました。つまり、病期が進行し橈骨手根関節や手根中央関節に関節症変化が及んでも、橈骨と月状骨間には関節症変化が存在しないことです。その後、Cooney (1994 年) を中心とする Mayo Clinic グループは、舟状骨偽関節・変形治癒後に発生した SLAC wrist を SNAC (scaphoid nonunion advanced collapse) wrist と呼称することとしました。

本シンポジウムは山形市で開催されました第 50 回日本手の外科学会学術総会において会長の荻野利彦山形大整形外科教授が企画され、私もその企画の一部に参加させていただいたものです。整形外科医による認識度がまだ低いと思われる SLAC wrist, SNAC wrist の病態や治療法のほか、Kienböck 病、橈骨遠位端骨折後の変形性手関節症に対する治療について 6 人の先生に執筆していただきました。

谷口泰徳先生 (和歌山県立医大) には SLAC, SNAC wrist の発生機序について記載してもらいました。Watson と Ryu (1984 年) は SLAC wrist の発生原因を舟状骨の掌屈回旋とし、最初に橈骨舟状骨間に関節症変化が発生し、そして次第に有頭骨月状骨間に変化が波及すると説明しています。谷口先生は彼らが病態として提唱している 2 本のティースプーン説に科学的根拠がなく、また、舟状骨掌屈回旋の何%が SLAC wrist に移行するかなどが不明であり、真の病態について解明される必要があることを力説しています。

岩崎倫政先生 (北海道大) には、SLAC, SNAC wrist に対する種々の手術治療法に関して記載してもらいました。SLAC および SNAC wrist に対する病期別の治療戦略について総括的に考察しています。

小野浩史先生 (国保中央病院) には、SLAC wrist に対する部分手関節固定術について記載していただきました。小野先生は舟状月状骨間固定術と有頭骨鉤月状三角骨間関節固定術＋舟状骨切除術の比較検討について報告しています。

香月憲一先生 (大阪市立大学) には舟状骨偽関節によって発生した変形性手関節症の治療について記載してもらいました。関節固定術 (特に部分手関節固定術)、近位手根列切除術の適応について詳述しています。

矢島弘嗣先生 (奈良県立医大) には Kienböck 病による変形性手関節症に対する腱球移植術の成績について記載していただきました。矢島先生は Kienböck 病での Lichtman 分類 stage IIIb と stage IV 例に対して腱球移植術と仮手根骨固定術を併用した症例の良好な成績について報告しています。

坪川直人先生(新潟手の外科研究所)には、橈骨遠位端骨折後の手関節障害に対する手術治療について記載してもらいました。橈骨遠位端骨折後の手関節障害に対して橈骨矯正骨切り術、尺骨短縮骨切り術、近位橈尺関節障害に対する手術の3つについて適応、成績について報告しています。

6人の先生の論文を読みますと、「変形性手関節症の治療」に関する現状がわかると思います。今回の誌上シンポジウムが「変形性手関節症」について読者の理解を深め、さらなる研究に役立つものとなれば幸いです。